歯科技工士と歯科医師で咬合再構築治療の予知性を考える

「歯科医師が考えるインプラント治療の永続性
－　治療計画、咬合、審美性、歯周環境を考慮して　－」

松本歯科大学臨床教授　小川洋一

欠損が広範囲に及ぶ症例は、咬合を再構築することで質の高い治療結果を得ることが可能となる。このことは欠損補綴治療の基本である「一口腔単位」の治療概念を応用する事にほかならない。

同時に、治療結果には高い予知性を考えることは必須であり、治療結果に永続性が伴ってこそ、はじめて歯科治療の成功と言えるであろう。

治療の永続性の具現化とは、補綴物製作にあたって十分な耐久性を持たせた技工設計を考慮することであり、同時に高いメンテナンスビリティを持った補綴形態を付与することである。

そのためには、治療を始める前の段階で歯科技工士と歯科医師が治療のゴールを設定することが大切である。

治療のゴールを歯科技工士と歯科医師が共有しながら必要なステップを進める上で、治療計画立案の時点からラボサイドとクリニックサイドの連携を図ることが理想である。

また近年では、治療結果に機能回復のみならず、審美的要素を考える事が必要な項目となっている。欠損が広範囲に進行した症例では、顔貌の変化が生じている場合が少なくない。すなわち歯の審美性のみならず、顔貌から考えた審美性の獲得を診断のひとつに加えることが、一口腔単位での治療の成功の鍵であると言えよう。

本講演では広範囲補綴の歯のリポジショニングを必要性と、顔貌を含めた咬合の再構成は何かを考え、新しい一口腔単の治療指針を考察する。

同時にラボサイドとクリニックサイドの連携をどうすべきかを考え、治療の永続性獲得のための術を会場の諸氏と一緒に模索したい。